

巻 頭 言

IMU 総裁／東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構
中島 啓

国際数学連合（以下 IMU）の総裁として数学通信に何か書きませんか、とお誘いを受け、国際数学者会議（以下 ICM）がもう少し近づいて、総裁として色々な仕事をしてから書きます、とお引き受けした。そろそろ何を書こうか考えていたところ、柏原先生のアーベル賞受賞のニュースが飛び込んできた。柏原先生のこれまでの業績からして時間の問題だろう、とは思っていたが、実際に受賞のニュースを聞くと、とても嬉しい。柏原先生の業績については数学会の会員の方はよくご存知のことと思うので、今回のニュースでアーベル賞についての認知が広がると思う。ちなみに、IMU はヨーロッパ数学会と共に、アーベル賞の選考委員をノルウェー科学文学アカデミーに推薦する役割を果たしている。アーベル賞が国際的に認知されるために手助けになればと考え、IMU の賞の選考委員と同じように時間をかけて議論して推薦している。

IMU の役割の一つとしてフィールズ賞の授賞があり、総裁として選考会議の議長を務めていて、いろいろと考えていること、思うことがあるが、選考の内容については口外禁止の規則があるので、ここには書けない。もう一つの重要な役割に、ICM の開催において、プログラムの作成、特に講演者の選定を行うことがある。1990 年に京都で ICM が開催されたが、実際に参加した人は私よりも数年下の世代までと思うので、それよりも若い人たちはどれくらい参加経験があるだろうか？また、1990 年当時に比べて国際研究集会がずっと多くなった現在に ICM を開催する意義は何なのか、疑問に思われている方もおられるかもしれない。そういう理由から、ほとんどの会員の方にはよく知られているとは思いつつも、改めて ICM の意義と、そこにおいて IMU が果たしている役割を説明させていただきたい。

まず一番に ICM が他の研究集会と違うのは、全ての分野を網羅していることである。自分の研究分野でどういう発展があるのかを知る手段は多々あると思うが、他の分野で何が起きているのかを知る機会は思いの外少ない。ICM はその貴重な機会を提供している。これは特に新しい研究の方向性を探っている人たち、特に若い研究者にとって有益なはずである。私自身が IMU で役割を果たそうと思った理由の一つが、1990 年の ICM で講演を聞いて新しい研究の方向を見出した経験にあった。また、発展途上国の学生・研究者は、まだまだ最先端の研究に触れる機会が限られており、ICM の開催国はそういう人たちの参加をサポートするプログラムを提供することを期待されている。こういう交流を通じて新しい人材を発掘することは、開

催国にとっても有益なはずである。

2026 年の開催に向けて、現在講演者がほぼ決まりつつある。その選定においては、最先端の重要な研究を行っている人を選ぶことはもちろんであるが、上に書いたことを踏まえて、研究分野と地域をできるだけカバーする多様な講演者リストになること、も大切である。講演者の選考方法について簡単に説明すると、IMU の実行委員会が ICM プログラム委員会（以下 PC）のメンバーを選び、その PC が 20 ある各分野ごとに、数人からなるセッションパネルを選考する。セッションパネルは、該当する分野の講演者を推薦し、それに基づき PC が各分野ごとの招待講演者を決定する。招待講演はいくつかの分野がパラレルに行われる。一方、一つの時間枠を占める全体講演者については、セッションパネルの推薦はあるものの、PC での議論がより重要な役割を果たすことになる。IMU 実行委員会の役割は、最初に PC を構成するのと、一番最後に上がってきた講演者リストについて、個別ではなく全体的に助言を行うことである。

一般に、ICM の講演者に選ばれることは、その研究が重要である、と世界的に認識されていることを意味し、アーベル賞の受賞の榮譽には比べるべくもないが、顕彰の側面を持っている。IMU では PC とセッションパネルの各委員に、公平な選考をするために利益相反（conflicts of interest）がある場合は議論に入らないこと、誰もが無意識の偏見（unconscious bias）を持っていることを認識してもらうこと、を約束してもらっている。講演者の選定にあたってセッションパネルの役割は重要であり、またその委員は該当分野での招待講演をすることができない規則があるので、過去の ICM での講演者が委員を務めるケースが多い。また、多くの国から講演者が選ばれているかどうかや、女性研究者の業績を無意識の偏見の下で不当に低評価していないかをチェックするために、講演者の分布の統計に注意を払っている。

講演候補者の推薦はセッションパネルの委員が中心になるが、加盟機関（日本では日本学術会議の数理科学委員会の下にある IMU 分科会）や、さまざまな数学会からの推薦を受け付けている。このように、ICM の開催のために世界中の数学者の協力をお願いしている。それだけのマンパワーをかける価値は、数学界全体として研究成果を評価した上で、次世代の研究者や、あるいは広く社会に伝えることの重要性にあると思う。

東京が 2030 年 ICM に開催地として立候補を計画していることを、年会で聞かれた会員の方も多いであろう。他の都市の立候補もあると聞いているので、総裁としての立場上、ICM 招致準備委員会の中には入らないことにしている。この巻頭言で多くの方に ICM の意義を理解していただき、たくさんのサポートに支えられた良いプランを提案していただくことになればと、期待している。